

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」（マルコ5：41）

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第29号

2017年10月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者：篠田 茜

「二人は一体となり」

—ハガルとサライの協働を読み解く— 創世記16章から

日本バプテスト神学校 教務主任 渡邊さゆり

「女主人サライのもとから逃げているところです」（創16:8）。こう述べる彼女の身に、何が起こったのでしょうか。この話は、女同士の嫉みの話と解されてきました。女主人サライは、エジプト人女奴隷ハガルを夫に差し出し、ハガルは妊娠しないサライを軽視した、と。

先日、わたしは「女性たちが受ける暴力の問題」について話し合うキリスト教の会議に参加しました。出席者は口をそろえ「被害者のほとんどが女性たちであることを考えると、これは男性たちの問題、とテーマを訂正する必要がある」と言いました。「暴力について学ぶ」場に、加害当事者が出席することは困難です。「何か他のテーマの題名をつけて集めればよい」との意見まで出ました。わたしたちは、自らが引き起こしている重大な間違いに気づき、訂正し、改めることが不得手です。わたしは、この話し合いの後、聖書を読むことにおいてもこれまでの解釈や、自らの「信念」を変更することができにくくなっていることを考えさせられました。

創世記16章にある記事を、サライとハガルのいがみ合いとして読むことが、「女はこわい」「女はしつこい」などの社会的に女性性を抑える精神性を助長してきたのではないのでしょうか？ サライーハガルのペアのみに焦点を合わせると、女たちが互いを蔑むことだけが取り上げられます。しかし、この物語を12章から23章までの大きな枠組みの中で読み直すとどうでしょう。アブラムが、サライをファラオに差し出したこと（12章）と、サライがハガルをアブラムに差し出したことを、対比してみます。16章ではアブラムのようにサライがエジプト人女奴隷ハガルをアブラムに差し出します。サライはハガルの立場をアブラムによって経験させられていたのです。サライは差し出された時、自ら逃げることができませんでした。しかし、ハガルは逃げました。しかし引き戻されます。このチャレンジは続きます。21章ではサライ自ら「（ハガルを）追い出してください」と言います。まるで、16章のヤハウエの言葉に抗うように。21章のサライについては、我が子のみを偏愛するいじわるな女との汚名を負わせる解釈が横行してきました。しかし、差し出され、拘束されるハガルを、外へ出すように後押しをしたのは、サライです。アブラムは「好きなようにするがいい」（16:6）と無責任です。ヤハウエは、「従順に仕えなさい」（直訳は「難儀に苦しみなさい」16:9）と、忍従を強めます。アブラムーヤハウエのペアは両者ともに女たちを次々に差し出し引き戻しますが、同じ経験を共有するサライーハガルは激しい感情のぶつかり合いを呈しつつ、お互いにこのサークルから逃げ出すように作用し合います。両極にあるかのような「二人は一体となり」生き抜く物語がここにあります。

女たちの情動的な描写のトリックにはまり、「どちらが善？」とジャッジを下す聖書講読は、女たちへ「難儀を苦しめ」というメッセージを送りかねません。聖書テキストの読みには「もうひとつ」も、あり得るのです。わたしたちは、早急にヤハウエーアブラムの「肩を持つ」読み方から離れる必要があります。もうこれ以上、サライも、ハガルも、差し出させないために。もう二度と、暴力の下に女たちを閉じ込めないために。

教役者コーナー

新しい聖書と女性の視点

司祭 ペテロ 岩城 聰 (大阪教区・退職)

『新共同訳聖書』の発行元である日本聖書協会から10月1日付けでプレスリリースが出され、2018年末には『聖書 聖書協会共同訳』が発行されるとの発表がなされました。1987年の『新共同訳聖書』からおよそ30年を経て、新しい翻訳の聖書が世に出されるわけです(新改訳や岩波書店訳、個人訳はすでにいろいろと出版されています)。

この事業の出発に当たっては、聖公会を含む18の教派・団体からなる諮問会議が開かれ、新しい翻訳理論(「スコプス理論」と呼ばれます)に基づいて、2009年12月には聖書協会の理事会で新翻訳事業を開始することが決められました。聖書協会のプレスリリースによると、この新翻訳事業の目的は、口語訳や新共同訳など過去の翻訳聖書の変遷を評価しつつ、「21世紀前半の日本における教会の標準訳となるべく...教会の礼拝で用いられること、原典に忠実であること、翻訳文が格調高い日本語であること、最新の学問的知見を踏まえること」にあるとされています。

今回の聖書協会共同訳の第一の特長は、参加教派・団体の数が多いことが挙げられます。『新共同訳』では、カトリック教会、聖公会、日本基督教団を始めとするプロテスタントが中心となって事業を進めました(もちろん新共同訳聖書を採用された教団は数多くおられます)。それに対して、今回は21もの教派・団体が共同して事業を進めてきました。

翻訳事業は、実際に原語(ギリシア語、ヘブライ語、ラテン語)から翻訳を進める翻訳担当、訳文を日本語として検討・推敲する日本語担当、編集委員、さらにこれらの作業で生じてきた諸問題を検討する各教派・団体代表からなる検討委員など、重層的な構造の中で進められてきました。筆者は日本聖公会の代表として、この検討委員会のメンバーを務めてきました。また、検討委員には、女性、障がい者、マイノリティの立場から意見を述べていただくために、日本フェミニスト神学・宣教センター共同ディレクターの山口里子さん、NPO 愛実の会理事長の島しず子さんが加わっています。その他、各教派代表の中にも数名の女性がおられ、活発に意見を述べておられました。とはいえ、委員の大多数は男性であり、教会の壁はまだ高いと感じざるを得ませんでした。

検討委員会では、それぞれの書名や訳語など、各教派や立場によって微妙に意見の異なる問題も話し合われました。聖書自体が男性中心社会である古代の文書なので、女性に関わる表現にも、わたしたちの目から見ると不適切、女性蔑視と思われるものがたくさんあります。また、聖書を翻訳する際に、現代における女性差別の視点が忍び込んでいる例もあります。例えば、ルカによる福音書1:48の「マリアの賛歌」における「身分の低い、この主のはしために **も** 目をとめてくださった」という訳文には、明らかに身分の高い人には当然であるが、身分の低い、しかも女性にまでの神が目を留められたというニュアンスが読み取られ、小さく弱くされた人にこそ神の愛が注がれるという福音の視点の欠如が見られます。現在出ているパイロット版では、「この身分の低い僕に、目を留めてくださった」と改められています。その他、女性に関わる訳語や訳文としては、次のようなものがありました。書簡に頻出する「兄

弟たち」という呼びかけの言葉は、男性形ながら本来女性をも含む表現であるにもかかわらず、現代の文脈では女性を排除するように聞こえます。パイロット版では「きょうだいたち」と表記し、男女ともに含まれるというニュアンスを持たせているようです。また旧約聖書に多用される「側女」という表現についても、当時の婚姻制度の下で「下位の妻」であるという意味合いをより適切に反映する訳語が模索されています（まだ、結論については聞いていません）。

すでに有料で配布されているパイロット版を読むと、これまでの『新共同訳聖書』よりは読みやすく感じます。ただ、まだまだ未解決の問題性を抱えたままの見切り発車であるということも否定できません。

聖公会「女性」フォーラム@東京

聖職候補生 セシリア 下条知加子（東京教区）

第25回「聖公会「女性」フォーラム」が7月16日～17日、東京教区の聖パウロ教会を会場に、北海道から熊本まで約40名が参加して行われました。今回のテーマは「神の豊かさの中で～多様な性を回復し、自分たちを問い直す～」。選ばれた聖書箇所はガラテヤの信徒への手紙3章26-28節でした。開会礼拝と閉会聖餐式でこの箇所が読まれたのですが、新共同訳とちょっと違う訳なので紹介させていただきます。

「あなたがたは皆、神の子たちです。なぜなら、キリストの中へと洗礼を受けた人たちは皆、キリストを着たのです。ユダヤ人もギリシャ人もありません。奴隷も自由人もありません。男と女もありません。なぜなら、あなたがたは皆、一人だからです。」（『虹は私たちの間に - 性と生の正義に向けて』山口里子著（新教出版社）p.290）



講話をされる平良愛香さん

開会礼拝の司式とお話、発題講話は平良愛香さん（日本キリスト教団三・一教会牧師）。まず聖書のお話から、ユダヤ人とギリシャ人（異邦人）、奴隷と自由人というのも、男と女というのさえ人間がつくった差異なのだというパウロのメッセージに、あらためて強烈な印象を受けました。講話では、ご自身の生まれ



LBGTを象徴するレインボーフラッグをイメージして（開会礼拝）

た頃から男性同性愛者であることをカミングアウトして牧師として働く現在までの経験をお話してくださいました。その中心は「（神に造られた）そのままがいいんだ。人間が作った差異なんて、たいしたことない、いや無意味だ。神の前で、その線引きは不要なのだ！」ということだったように思います。たとえ頭ではわかったような気がしても、感覚的にはなかなか乗り越えられないのがわたしたち人間なのだと思います。また、平良愛香さん作詞・作曲の「主につくられたわたし」、「おへんじ」や「かみさまのあいは（すべての人バージョン）」をともに歌う中で、わたしたちがしなくてよい・してはならない線引きを本当に沢山してしまっていること、わたしたちは一人ひとりそのまま神様にタププリ愛されていることを強く感じました。

閉会聖餐式は按手を受けられたばかりの中尾貢三子司祭が司式・説教をしてくださいました。「わたしたち一人ひとり、神様が手間暇かけて一人ひとりユニーク（唯一無二）な存在としてつくられたいのちである」「神様がおつくりになったその人らしさを十分に生ききることを支えるということが、教会共同体に求められていること」というメッセージが印象に残りました。

来年は北海道で行われる予定です。みなさま、ご一緒に参加しませんか！


 婦人伝道師シリーズ①

婦人伝道師との出会い

アグネス 北川規美子（大阪教区）

ナザレ修女会の千代修女、ヨハネ修士会のクレイトン神父、そして神崎幸子婦人伝道師にお会いしたのは、50年以上昔の市川聖マリア教会の中高生キャンプでのことでした。シスターやブラザーの姿を見るのは初めてでしたが、神崎先生の登場もわたしには強烈で、「生き方は選ぶこと」であることを意識した最初の出来事でした。その時、神崎先生はドストエフスキーの『罪と罰』を紹介しながら「イエスという方」について話されたのですが、大人の小説の読み始めも彼女の講話からのことでした。

その後1965年、神崎先生が教会に赴任して来られ、社会と教会、生きることについてなど考え始めていた高校時代のわたしにとって、神崎先生と話すことは、教会生活を続けながら自問自答していた大切な時間となっていました。

今から10年程前に婦人伝道師の名簿に出会い、神崎先生の名前を探しながら、随分多くの婦人伝道師の方々が居られたことに驚かされました。未だ邦人教役者の少なかった1890年頃より1980年まで、400名ほどの婦人伝道師の名前が記載されています。今現在、婦人伝道師という職位はありませんが、彼女たちがどの様な人たちと歩もうとしたか、やっかいな高校生の話に時間を空けていただいた個人的な体験からも、その働きがうかがえます。またその名簿から、かつてのミッションであった医療、福祉の領域に多くの婦人伝道師が働いていたことを知り、視界が広げられた思いでした。

ところで、医療分野で働かれた婦人伝道師の姿を追っていくなかで、話は50数年前の市川に戻り、当時ご高齢でいらした松本正雄司祭の妻で、ジョウ（元婦人伝道師。旧姓兵頭）先生と呼ばれていた人にも至ってビックリ。そのことは、次号に書かせていただきます。


 ■■■■ コラム わたしの瞳に映る景色 ⑮

～バイセクシュアル～

司祭 アンブロージア 後藤香織（中部教区）

2009年8月大阪聖パウロ教会を会場に開かれた公開学習会「セクシュアル・マイノリティの声に聴く わたしの瞳にうつる風景 ～性同一性障がい者の声～」で、わたしは自分のセクシュアリティを「バイセクシュアル(bisexual)」だと、何気なく言いました。何気なくなのは、わたしがこだわっているのは、自分の性的自認がトランスジェンダーであること、つまり男の身体で生まれてきたのだけれども、わたしは自分で女性だと認識しているところです。普段、わたしの性的指向がどうであるのかは、わたしの中では意識に昇ってくることはあまりありませんので、性的指向を問われれば、「バイセクシュアル」と答えますが、普段はわたしは「MtF トランスジェンダー」ですとだけ言う

ことが多いのです。

この「バイセクシュアル」だという発言の後、早速、わたしの言葉尻を捉えて、『後藤はトランスジェンダーだと言っていたのに、公開学習会では、「バイセクシュアル」だと言った。これまでの発言はウソだった』などという、基本的な学習もしてくれていない方からの、非難がありました。本当に誠実でない無責任な発言はいい加減にして欲しいですが、案外、多くの方が性的指向と性的自認の違いが分かっていないのではないかと、いまさらながらに感じるがあります。

『タリタ・クム』第25号で説明をしました、セクシュアリティを大まかに分類する3要素、「生物学的な性 (sex)」「性的自認 (gender)

identity)」「性的指向 (sexual orientation)」は、互いに影響し合いません。

例えば、わたしの性的自認が女性であることが、わたしの性的指向に影響することはないのです。つまり、わたしの性的自認が女性であるからといって、性的指向が男性に向くとは限りません。すでに述べたように、わたしの性的指向は、女性と男性の両方に向いている「バイセクシュアル」です。そしてそれは、わたしの「トランスジェンダー」であるという性的自認とは関係はないのです。

さて、このLGBTの中のBが指し示す、「バイセクシュアル」は、性的指向が同性にも異性にも向く状態をいいます。「バイセクシュアル」は必ずしも女性と男性という性別二元の概念を含むのではなく、「同じ性別」と「違う性別」を意味するにすぎないという考え方もあります。

この両性愛・バイセクシュアルは、すでに概観したレズビアンやゲイなどの同性愛と異性愛の中間の状態ではなく、また違う概念のセクシュアリティです。

LGBTの中でも、他のセクシュアリティからも誤解されることがあり、それゆえ偏見にさらされやすいセクシュアリティですので、今回はご一緒に概観してみたいと思います。

バイセクシュアルに向けられる偏見には、優柔不断だとか、欲深いか、浮気性の信頼できない人だとか、淫らな人などというものがあります。こういった偏見は、その偏見を抱く人の思想信条から一方的に向けられるもので、真実ではありません。

どこから、このような偏見が生まれてくるのか理由は様々あるのですが、もっとも基本的な理由は、バイセクシュアルの人は、複数の人と同時に関係性を結ぶという思い込みから向けられるものなのでしょう。実際には一対一の関係性を結ぶバイセクシュアルの人が多数なのですが、このように述べてしまうと、複数の人と同時に関係性を結ぶ人を否定してしまうこととなりますので、先に、ポリアモリーへの偏見を解いておきたいと思います。

基本的には価値中立な区別ですが、一対一で結ぶ関係性をモノアモリー、同時に複数の人と

関係性を結ぶ状態をポリアモリーと呼びます。多くの国の社会制度が、モノガミーの関係を基本にしていますし、またどのセクシュアリティでも、ポリアモリーよりはモノアモリーの人が多い（これはバイセクシュアルでも同じです）こともあって、同時に複数の人と関係性を結ぶことは、一般的に不誠実なことであると考えられています。複数の人と同時に関係性を結ぶという偏見が、この視点からバイセクシュアルに向けられることが多いので、わたしたちバイセクシュアルは、不誠実である、欲深い、淫らで浮気性であると思われるようです。

そもそもモノガミー規範が一般的な多くの社会では、ポリアモリーは良くないことであり、浮気などを、体のいい言葉に言いかけているだけだと思われるでしょう。しかし、ポリガミーの人が一般的に性に対して無責任な訳ではないですし、セックス依存症などの病気で複数の人と同時に関係性を結ぶのでもありません。ポリガミーとは、単に同距離、同価値に別々のベクトルで好きな人がいる状態のことです。ただ、わたしたちの社会は、モノガミーの関係を規範としていますので、ポリガミーの人が、人との関係で、モノガミーの人よりは多くの課題をもつ確率が高いのかもしれませんがね。

さて、バイセクシュアルの話に戻しましょう。バイセクシュアルをカミングアウトしたときに向けられる差別的な発言には、「女とも男とも楽しめるなんて良いね」や「両刀使い」というようなものがあります。

この発言は、性的自認をバイセクシュアルであるとする認識過程で、女性とも男性とも性的な関係をもったという決めつけがあるようです。異性愛者が、自分の性的指向を認識するために、実際に性的関係を持つことが必要ではないように、わたしたちセクシュアル・マイノリティも同じです。ゲイやレズビアンは、同性との性的な関係はなくても同性愛指向であることを認識しますし、バイセクシュアルも、多くの場合、異性との性的な関係、同性との性的な関係のどちらか、もしくはどちらをも経験しないまま、自分の性的指向を認識するのです。

欲深いか、不誠実、気が多いのではなく、ただ、同性と異性どちらかの限られたグループ

からしか、パートナーを選ばなければならないという括りがないだけのことです。残念なことに、この考え方は同性愛の人たちからも敬遠されることがあります。それゆえ、仲間であると思っている同性愛の人からは「最後は異性に逃げて結婚する」という視線が、バイセクシュアルに投げかけられることがあるのです。

また、同性と関係を作れば同性愛者、異性と関係を作れば異性愛者と受け止められ、バイセクシュアルであるという自分のセクシュアリティが尊重されないこともしばしばで、これもわたしたちバイセクシュアルには、残念なことの一つです。

今年はずっと過ぎてしまいましたが、毎年9月23日は、「バイセクシュアルデー」です。また来年9月23日はバイセクシュアルについて、考えていただければと思います。

●モノアモリー/Monoamory

交際相手を互いに一人に限定する恋愛関係。一夫一妻など、一対一のパートナーシップの形態をモノガミー/Monogamyと呼ぶ。当然であるがLGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）でも、モノガミーの人(モノガマス/monogamous)もおり、ポリガミーの人(ポリガマス/polygamous)もいて、ポリガマスは少数派である。

●ポリアモリー/Polyamory

恋愛の交際相手、その親密な関係を同時期に、一人だけに限定しない可能性に開かれていて、全ての関係者が全ての状況を知る選択が可能であり、全員がすべての関係に合意している、という考え方に基づく行為、ライフスタイル、または恋愛関係のこと。一対一でないこの形態のパートナーシップをポリガミー(複婚)/Polygamyと呼び、一妻多夫制/polyandry、一夫多妻制/polygynyなどがある。

女性デスクから 第3回日本聖公会女性団体連絡協議会を開催しました。

報告/女性デスク(吉谷かおる、木川田道子)

女性デスクの呼びかけで2年に一度開催することになっている標記の会合を9月4~6日、管区事務所を会場に行った。集まった10の団体やネットワーク(日本聖公会婦人会、GFS、女性が教会を考える会、リグリマ、バンサーイターン共の会、UN派遣者、女性の教役者、NCC女性委員会聖公会派遣委員、日本YWCA、正義と平和委員会ジェンダープロジェクト)の報告からは「後に続く人材の発掘」、「持続可能な支援やボランティアスタッフのあり方」、「女性たちによる運動の歴史をどう語り継いでいくか」、「意思決定機関でのクォータ(割り当て)制の実現に向けて」、「神学教育における男性中心の視点の見直し」、「女性のリーダーシップ養成」、「アジアの女性たちとのつながりをどう作っていくか」などの課題が挙げられた。

また今回は、韓日協働宣教大会声明に基づき、日韓の女性の交流を進めるためにゲストとして大韓聖公会、閔淑姫司祭(両性平等局長)、韓周希司祭(女性司祭会 総務)、李榮友さん(全国お母さん連合会会長)



2日目講演会講師を囲んで

にもおいでいただき、「大韓聖公会の女性たちの取り組みに学ぶ」時間を設けた。スライドを見ながら、女性の司祭実現への道のりと課題の他、これまでのさまざまな取り組み〜クォータ制実現のキャンペーン運動や女性の活動支援のための後援会創設、脱北者支援のためのカフェ経営、女性宣教センターの立ち上げの経緯やビジョンなどについて伺った。すぐ隣の管区の女性たちの力強い活動は私たちにとっても大いに参考になり、励まされた。二日目の午後には、寺岡シホ子さん(公益財団法人日本キリスト教婦人矯風会メンバー)を

講師に公開講演会『日本軍「慰安婦」問題について学ぶ』を開催し、平日の昼間にも関わらず、教派を超えた約30名の来場者があった。このテーマを選んだ理由は、私たちが日韓の交流を進めていくためにはまず歴史の事実から学び、被害を受けた側に立って“解決”や“謝罪”とはどうあるべきなのかを考えたいと思ったからだ。寺岡さんからは歴史的経緯、日本政府がこれまでに取ってきた対応や、被害者からの訴えがどう裁判の中で扱われてきたのか、歴史教科書における記述の問題、市民運動の展開、また今社会問題になっている「JK(女子高生)ビジネス」などについて話され、現代も形を変えて少女や女性たちに性的搾取や性暴力が起きていることが歴史的、社会的な構造の問題として語られた。翌日の「wam アクティブミュージアム 女たちの戦争と平和資料館」へのオプションルツアーでの見学を経て、「慰安婦」問題とは、政治、外交の問題ではなく、私たち自身にも関わる一人ひとりのいのちの問題であることを改めて感じた。

最終日には、上田亜樹子司祭、関司祭、韓司祭ら3人の共同司式による聖餐式が実現した。日本は来年の2018年、韓国は2021年に女性の司祭按手20年を迎える。私たちの間の距離が一層近くなっていくことを願っている。

最後になったが、3日間の会期中、通訳を務めてくださった朴銀英さん(九州教区)、資料の翻訳、連絡調整の労を取ってくださった大韓聖公会の柳時京教務院局長、講演会会場や礼拝でお世話になった牛込聖バルナバ教会、全面的に運営を支えていただいた日本聖公会管区事務所の矢萩総主事はじめ事務所のスタッフにこの場を借りて御礼申し上げる。第4回協議会にはより多くの団体が集えますように。



3日目共同司式による聖餐式
左から関司祭 上田司祭 韓司祭

韓国からの参加者の声

大韓聖公会 両性平等局長 司祭 マーガレット 関淑姫(ミンスッキ)

まず大韓聖公会メンバーを今回の女性団体連絡協議会に招待していただいたことを感謝致します。今回の参加者は両性平等局長マーガレット関淑姫(ミンスッキ)司祭、女性聖職者会の総務ハンナ韓周希(ハンジュヒ)司祭、女性活動団体協議会会長マリア李栄友(イヨンウ)さんでした。

大韓聖公会の主な女性団体がオモニ会(お母さんの会)とGFSだけの構成になっているのと違って日本聖公会は多様な女性団体が活動しているのと、婦人会とGFS以外にも外国の少数民族を支援する団体や性的少数者と連帯するジェンダープロジェクトが印象的でした。固定されている韓国の女性活動より様々な分野で活発に働いている日本聖公会女性団体の活動報告を通して私自身も刺激をいただきました。

今回の協議会に参加するために準備をしながら、重点に置いたのは「神学生と聖職者に対する性平等教育と性暴力予防教育」について進行状況を確認することでした。

大韓聖公会側はまず神学校で新入生のオリエンテーションの中で一日研修を予定しています。聖職者に対する教育は議長主教(訳注:日本聖公会の首座主教)が肯定的に受け入れて、毎年催される全国聖職者研修の時の研修プログラムとすることになりました。この流れで日本聖公会側の進行状況についても詳しく聞きたかったのですが、あまり聞けず残念でした。

しかし、二日目の一般公開の『日本軍「慰安婦」』についての講演会は、韓国で頻繁に扱う主題なのでいつもの内容とあまり期待しなかったのですが、講演をなさった寺岡さんの客観的で共感できる歴史意識に基づく講演に大きく感動しました。『日本軍「慰安婦」問題』は被害者だけではなく戦争の中でいつも被害を受け易いすべての女性の問題だと強く思いました。

今回の協議会で日本聖公会の女性デスクは議論の結果としてこれからの課題をまとめました。

日本聖公会の女性たちの連帯を続ける人材発掘、来年20周年を迎える女性聖職者の記念事業、神学生と聖職者に対するハラスメント予防教育、意思決定機構への女性の参画(202230)、女性のリーダー

ーシップ養成、反核活動、ジェンダー平等に関する活動、アジアの聖公会の女性たちの連帯等でした。大韓聖公会にも参考になる課題だったので韓国でも共有できることを願っています。

今回の参加で感じたのは、日本聖公会に比べて大韓聖公会の女性活動団体支援が不足している事、女性たちの連帯を強めるためには多様な活動を繋げるという事でした。これは私たち大韓聖公会の女性の願いでもあります。

私たち女性の連帯で神様の国への地平がもっと広がったらいいと思います。

※ 以下はこの3日間の交流を通して作られた代祷で、最終日の聖餐式でお捧げしました。今後機会あるごとに用いていただけたらありがたいです。韓国語版もあります。

〈 韓日「女性」協働のための祈り 〉

いのちの源である神さま

わたしたち韓国と日本の「女性」たちが、信徒・聖職ともにそれぞれの賜物を生かし、パートナーシップを深めていくために、多くの機会が与えられていることを感謝いたします。

わたしたちが過去の苦しみを分かち合い、未来に向けてともに正義を回復し平和を実現する器となることができるよう。

すべての人のいのちが豊かにされ、人権が尊重されるように、わたしたちを差別と暴力に抵抗し和解の福音に生きるものとしてください。

そして、絶望から希望へ、嘆きから喜びへ、孤独から連帯へと向かう旅路をわたしたちがともに歩み続けることができるように導いてください。

イエスのみ名によって祈ります。 アーメン



ジェンダープロジェクトより



今回も多くの示唆をいただける、原稿をいただき、本当にありがとうございました。聖書を読み解くこと、聖書の翻訳作業、女性フォーラム、15 回目の後藤司祭によるコラムと今号より始まった北川さんの婦人伝道師に関するシリーズ、第3 回日本聖公会女性団体連絡協議会と韓国のゲストよりの感想などを読みながら、様々な場所と立場を超えて、ジェンダーの視点を持ち働く一人ひとりの声が豊かに伝わってきます。課題も多いですが、もっと多くの人々が豊かにつながることを期待してお祈りしています。この「タリタ・クム」を読まれる皆様、主と共にいきましょう。感謝。

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるというとらえ方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3~4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたくと願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ 5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。